

# セメスター留学の教育的価値 —質問紙調査による一考察—

## Educational Value of a Study Abroad Program —Analysis through the Quantitative and Qualitative Study—

前田 ひとみ  
Hitomi MAEDA

*Keywords* : Significance of study abroad, global human resources, cross-cultural understanding  
キーワード : 海外留学の意義、グローバル人材、異文化理解

### 1. はじめに

学生の海外留学を支援し、国際性豊かな人材を育成することは、高等教育における課題の1つとして認識されており、高等教育機関においても様々な海外留学促進策が展開されている(河合、2011; 文部科学省、2008)。文部科学省(2008)の『留学生30万人計画』によると、海外留学の効果として、「国際的通用性のある人材の育成」、及び「国際体験、国際理解・知識の拡大、語学力の向上」など国際的な競争環境の中で能力や可能性を広げることが期待できるとあり、海外留学の意義を述べている。このように高等教育機関に寄せられる期待を背景に、本学英米語学科では1学期間(実質的には8月~12月の4か月間)、学生を海外に送り出すセメスター留学を実施しているが、学生は何を学び、帰国するのか。本研究は本学英米語学科におけるセメスター留学の教育的価値を整理し、検証する端緒である。

本論文では関連する分野としてまず、(1)日本人の国際的素養(海外留学状況・語学力の現状・国際経験の現状)と、(2)海外留学の教育的価値、の2つの視点から研究の背景を整理し、次に質問紙調査の調査方法を述べ、セメスター留学から帰国した直後の本学英米語学科の学生を対象に行った調査結果を報告する。

### 2. 本研究の背景

#### 2-1. 日本人の国際的素養(海外留学状況・語学力の現状・国際経験の現状)

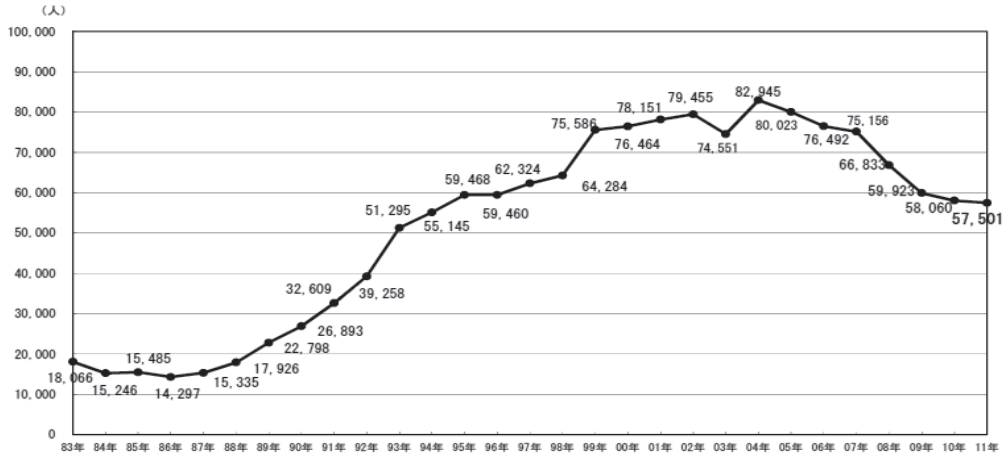
日々経済のグローバル化が刻々と進む中、採用や昇進にTOEICスコアが重視される傾向や社内英語公用語化に向けた取り組み、小池科研グループによるビジネスの世界における英語に

よるコミュニケーション能力重視の調査結果報告（小池&高田&松井&寺内、2010）など、英語コミュニケーション能力の育成に対する社会的ニーズはグローバル化拡大と共に高まってきており、国際社会で通用する「グローバル人材」が渴望されている。「グローバル人材」とは産学人材育成パートナーシップ（2010）によると、「物事を主体的に考え、多様なバックグラウンドをもつ同僚、取引先、顧客等に自分の考えを分かりやすく伝え、文化的・歴史的なバックグラウンドに由来する価値観や特性の差異を乗り越えて、相手の立場にたって互いを理解し、さらにはそうした差異からそれぞれの強みを引き出して活用し」、相乗効果により新しい価値を生み出すことができる人材であり、このグローバル人材に求められる能力としては、①「社会人基礎力」、②「外国語でのコミュニケーション能力」、③「異文化理解・活用力」の3つの能力を共通してもっていることとしている。3つの能力要素はそれぞれ独立した能力ではなく、相互に重複する能力であるとし、「社会人基礎力」に含まれる柔軟性、状況把握力、創造力は「異文化理解・活用力」と重なっており、発信力、傾聴力は「外国語でのコミュニケーション能力」と重なり、「異文化理解・活用力」とは多様な文化や歴史を背景とする価値観やコミュニケーション方法の差異を認識して行動し、「異文化の差」をもった多様な人々の強みを認識し、それらを引き出して相乗効果によって新しい価値を生み出すことができる人材である（pp.32-33）。このように日本社会にとってグローバル人材は我々の目指す姿であることが明示されているが、実際、現状はどうか。ここでは日本人の国際的素養として海外留学状況、語学力の現状、国際経験の現状を簡潔にまとめた。

### 2-1-1. 海外留学状況

経済協力開発機構（OECD）、ユネスコ統計局などの資料をもとに2014年に文部科学省がまとめたデータによると（図表1）、2011年度における日本から海外の高等教育機関への留学者数は57,501人になり、高等教育段階の日本人学生のうち外国の教育機関に在学しているのは1%と報告されている（文部科学省、2014a；OECDインディケーター、2014）。これは文部科学省（2014a）によると2004年の82,945人のピークを境に7年連続で減少している結果となり、日本の若者の「草食化」や「内向き志向」の強まりなどが指摘されている<sup>1)</sup>。年々減少傾向を示している日本人留学者数だが、政府は東京オリンピック・パラリンピック競技大会が開催される2020年までに大学生の海外留学を現行の6万人から12万人、高校生の海外留学を現行の3万人から6万人の2倍に増やす目標を掲げた（文部科学省、2014b）。政府は少子高齢化や社会のグローバル化が急速に進展するなか、グローバルな人材を育成するには「異文化理解の促進やアイデンティティの確立といった国際的素養を培う」ことが重要であるとし、海外留学は国際的素養を培う機会であると海外留学派遣の意義を示している（内閣官房他、2014）。

図表1 日本人の海外留学状況



出典：平成26年3月文部科学省集計（文部科学省、2014a）

2-1-2. 語学力の現状

政府は世界に通用するグローバル人材育成の為、官民協働のもと社会全体で取り組む「留学促進キャンペーン」を打ち出した。これは社会と接続した教育機関である大学での育成を充実させることが重要と位置づけしているものであるが、現況はグローバル人材に必要不可欠だとされる日本人の語学力（特に英語）や国際経験は他のアジア主要国と比較しても低いことが指摘されている。例えば、語学力（英語）に関していえば、TOEFL (iBT120点満点) では163か国中135位、アジアの中では30か国中27位となっている（図表2）。これはアジア内順位9位の韓国や16位の中国よりもかなり下に位置し、英語教育に力をいれている割には低い結果となっている。

図表2 TOEFL (iBT) 国別ランキング（120点が最高点）

〈全体順位〉163か国中

順位	国名	TOEFLスコア
1位	オランダ	100
2位	デンマーク	99
3位	シンガポール	98
	オーストリア	
：	：	：
80位	韓国	81
：	：	：
105位	中国	77
：	：	：
135位	日本	70
	カメルーン	
	トーゴ	
	クウェート	
：	：	：
163位	モリタニア	58

〈アジア内順位〉30か国中

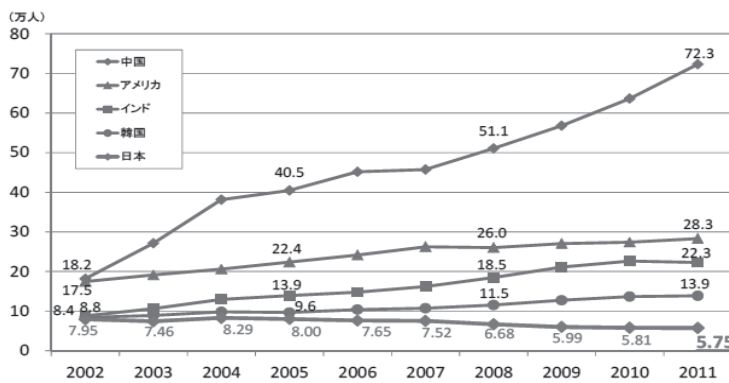
順位	国名	TOEFLスコア
1位	シンガポール	98
2位	インド	92
3位	マレーシア	88
	フィリピン	
	パキスタン	
：	：	：
9位	韓国	81
：	：	：
16位	中国	77
：	：	：
24位	アフガニスタン	73
	モンゴル	
	ベトナム	
27位	日本	70
：	：	：
30位	カンボジア	63

出典：経済産業省（2011）

### 2-1-3. 国際経験の現状

また国際経験の機会においていえば、諸外国から海外へ留学する学生数は増加する傾向にある一方で、日本だけが減少傾向にあり、例えば計算したところ2011年度の日本から海外への留学者数は5.75万人に対し、中国から海外への留学者数は72.3万人であり、人口比（日本の人口1億2790万人、中国の人口13億4735万人）を考慮すると中国の留学者数は日本の1.2倍となり、また韓国から海外への留学者数は13.9万人であり、人口比（韓国の人口4978万人）を考慮すると韓国の留学者数は日本の6.2倍にもなることがわかる（図表3）。英語力に関しても国際経験に関してもこれら公表されたデータで見ると、アジア主要国と比べ、大きく出遅れていることは間違いのないであろう。

図表3 各国における海外留学の状況



出典：内閣官房他（2014）

### 2-2. 海外留学の教育的価値

海外留学の教育的価値海外留学の学術的成果や教育的価値を検証する研究も多く、Rubin & Sutton（2001）は留学で得られる成果を①アカデミック（知識とスキルの開発）と②ノンアカデミック（情緒的、態度的、個人的成長）の2つに分け、足立（2010）は、留学の成果を①学問・学術の学び、②外国語運用能力の獲得、③異文化適応能力の獲得、④人間的成長、の4つに分類してその教育的価値に言及している。またIES Abroad（2011）は、留学プログラムの成果目標として、①知的発達（Intellectual Development）、②言語とコミュニケーションスキルの習得（Development of Language and Communication Skills）、③認知的成長（Cognitive Growth）、④対人関係における成長（Interpersonal Growth）、⑤個人の内的成長（Intrapersonal Growth）の5項目をあげ、それぞれの視点から留学の効果を検証している。さらに留学の教育的効果の中でも語学に特化した研究も興味深く、例えば木村（2011）は4週間程度の短期研修参加者を対象に英語力の向上についてテスト検証したところ、特にリスニング力に関して伸びが認められたと報告し、更に学習ストラテジーの使用度も高くなっていることから、英語学習に対してより自律性を身につけたのではないかと推察している。

このように海外留学に関して様々な成果や効果が報告されており、どのようなフレームワークから留学の教育的価値を考察するのか、が重要となるが、本稿では分析方法として学部生の海外留学の教育的価値を①学問・学術的学び、②外国語運用能力の獲得、③異文化適応能力の獲得、④人間的成長の4つの枠組みで論じた足立（2010）の研究結果の②～④を援用する（図表4）。詳細はのちに述べる。また本研究の質問項目作成には日本学生支援機構（2011a）の留学に関する調査結果「海外留学経験者追跡調査」も参照した。

図表4 学部生の海外留学の教育的価値

①学問・学術的学び	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本国では得られない、あるいは本国とは視点の異なる専門分野における知識、ないし教養</li> <li>・留学先の国・地域の社会、文化、歴史などに関する様々な知識</li> <li>・座学、体験学習(オフキャンパス学習)</li> </ul>
②外国語運用能力の獲得	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(特に学部留学の場合)教科書を読む、講義を聞く、ディスカッションに参加する、レポートを書くなどのアカデミックな活動を通して言語を習得する</li> <li>・(特に語学留学の場合)語学授業のカリキュラムを消化することにより、そのカリキュラムが意図したスキルと知識を習得する</li> <li>・日常生活をとおして、生活に密着した語彙や表現を身につける。現地に特有の事物(例:商品、食べ物、サービス、システム)や概念・習慣(例:行事、思想)とそれを表す言葉を学ぶ</li> </ul>
③異文化適応能力の獲得	<ul style="list-style-type: none"> <li>・未知・不明瞭なものを受け入れる寛容性、物事を複眼的にとらえること</li> <li>・新たな価値観・視点・常識を発見</li> <li>・自己の文化(価値観・常識・視点・習慣など)を再発見し相対化すること</li> </ul>
④人間的成長	<ul style="list-style-type: none"> <li>・能力開発(アカデミックな学びや異文化体験を通して習得する対人能力)</li> <li>・感情制御(感情表現を適切に行い、コントロールする能力)</li> <li>・自律を通して達成する自立(精神的な独立、問題解決能力、粘り強さ等)</li> <li>・成熟した対人関係の確立(他者との違いを受け入れる寛容さ、健全で持続的な対人関係を築ける力)</li> <li>・アイデンティティの確立(自己の文化、民族的アイデンティティの確立と促進)</li> <li>・目的の確立(留学をして自分のやりたいことが見つかった、自分の可能性も開けて見える)</li> <li>・人格・価値観の統合(画一的で厳格な価値判断から他者の信条・信念を認め、尊重できるようになり価値観と行動が一致する)</li> </ul>

出典：(足立、2010)を筆者がまとめた。

### 3. 研究方法

本論文の量的調査の枠組みとして、先述した足立（2010）の先行研究の①「学問・学術的学び」を除いた②～④のフレームワークを使用する。その理由として、足立（2010）も本論の中で述べているように「留学における“学問・学術的な学び”の意義は改めて確認する必要もなく、広く認知されている」(p.79) ことであり、また本国では得られない知識等は③「異文化適応能力の獲得」や④「人間的成長」にも相通じるところがあり、そのため本研究では新たなフレームワークとして次の3つの枠組みで集約して論じていく。

3つの枠組みとは、(1) 外国語（英語）運用能力の獲得、(2) 異文化・自文化理解及び異文化適応能力の獲得、(3) 人間的成長である。具体的には、

- (1) 「外国語（英語）運用能力の獲得」とは特に語学授業のカリキュラムが意図したスキルと知識の習得を意図する。つまりリーディング、ライティング、スピーキング、リスニング力の向上であり、ここでは客観的指標としてTOEIC試験による分析と学生自らが自身の語学力が成長（向上）したと思うか否かの視点から主観的感想を問うた。

- (2) 「異文化・自文化理解及び異文化適応能力の獲得」は、自国では得られない知識や教養を異国で得る事であり、異文化・自文化に対する理解、自己のアイデンティティの確立、文化的多様性の価値を理解する力等が含まれる。
- (3) 「人間的成長」は学生自らが成長したと感じるもので、柔軟性、コミュニケーション能力、主体性、精神的な自立などが含まれる。

#### 4. 結果と分析

1学期間のセメスター留学から帰国したばかりの本学英米語学科の学生54人に質問紙とインターネットによるアンケート調査を実施した。アンケートの質問項目作成においては、日本学生支援機構（2011a & 2011b&2011c）の平成23年度版海外留学経験者の追跡調査を整理し、独自に作成した。

留学先内訳は、プリティッシュコロンビア大学（カナダ）が44.4%、クィーンズランド大学（オーストラリア）が31.5%、バンクーバーアイランド大学（カナダ）が16.7%、アッシュランド大学（アメリカ）が7.4%である。まず留学した理由として（表1）、全体の92.6%が「英語力向上のため」と回答し、語学力向上に対する強い期待があったことが読み取れる。次に「視野を広げるため」は57.4%、「異文化への興味・憧れ」は53.7%、「異文化理解向上のため」は51.9%と留学した理由の過半数がそれら異文化理解につながる項目となっている。また「必修だったから（卒業単位の為）」と回答した学生は27.8%を占め、「就職で有利だと思われるから」と回答した学生は24.1%を占めるなど、卒業や就職のためという理由も学生にとってある程度強い動機となったことがうかがえる。「その他」を選択した1名（1.9%）の留学した理由も気になるところだが、この学生以外は全て以下の「留学した理由」に当てはまることから、質問紙の選択項目もおおむね妥当であったことを追記したい。

表1. 留学した理由（複数選択）	%	人数
英語力向上のため	92.6	50
視野を広げるため	57.4	31
異文化への興味・憧れ	53.7	29
異文化理解向上のため	51.9	28
必修だったから（卒業単位の為）	27.8	15
就職で有利だと思われるから	24.1	13
とりあえず行ってみようと思った	11.1	6
友達が行くから	3.7	2
親が強く勧めたから	1.9	1
その他	1.9	1



次に、先述した3つの枠組み（1）外国語（英語）運用能力の獲得、（2）異文化・自文化理解及び異文化適応能力の獲得、（3）人間的成長、から述べる。

### （1）外国語（英語）運用能力の獲得

#### A. 客観的指標（TOEIC IP）

外国語運用能力の獲得を評価する方法として様々なテストがあるが、ここでは大学で一般的に使用されるTOEIC IPでの考察を試みた。TOEICテストとは「英語によるコミュニケーション能力を幅広く評価する世界共通のテスト」（ETS, 2015）であり、TOEIC IPテストとは団体特別受験制度のことで高等教育機関において数多く使用されている試験形態であり、本学英米語学科の学生がキャンパス内で受験している試験形態もこれにあたる。

2014年度は66名の学生がセメスター留学に参加し、そのうち64名の学生が帰国直後にTOEIC IPを受験した。2013年6月と2014年6月の1年間で、Listening 36点、Reading 29点、合計点は65点上がった。更に留学直前に実施したTOEIC IP（2014年6月）結果とセメスター留学直後（2015年1月）の点数を比較すると、Listeningは30点、Reading 18点、合計点で48点伸びた。

一概には言えないが1年間本学のカリキュラムを通し、TOEIC IPの点数は65点伸び、“更に”4か月間のセメスター留学を通し、TOEIC IPの点数は48点継続して伸びたことが読み取れる。

#### B. 主観的感想

次に学生自らが自身の語学力が成長（向上）したと思うか否か問うた。学生主観として英語4技能（リスニング、スピーキング、ライティング、リーディング）について、「英語力はつきましたか。特についたと思うものを以下から選んでください」（表2）と質問した。結果、リスニング力（64.8%）とスピーキング力（61.1%）が高い結果となり、リーディング力が24.1%ともっとも低かった。また英語力は「ついていない」と回答した学生は0.0%であり、留学はつまり何らかの形で学生に英語力向上という貢献をしていることが読み取れる。

表2. 英語力はつきましたか。特についたと思うものを以下から選んでください。(複数選択)	%	人数
英語力（リスニング）	64.8	35
英語力（スピーキング）	61.1	33
英語力（ライティング）	35.2	19
英語力（リーディング）	24.1	13
ついていない	0.0	0

次に英語力4技能に加え、幅広く、英語学習への意欲や英語に対する興味に関しても質問を

行った。表3の「語学に関して留学して培った能力や得たもの」という問いでは、「リスニング」を挙げている学生の割合が最も多く75.9%を占め、「スピーキング」と回答した学生も59.3%で、6割以上の学生が留学で得たものとしてリスニング力とスピーキング力を挙げた。また「英語に関する語彙力や表現力」(55.6%)も6割近い学生が得たものとしてあげている。

それら英語4技能の向上だけでなく「英語への興味」(63.0%)、「英語学習への意欲」(57.4%)と、英語学習に対する姿勢への変化を挙げる学生も過半数を超え、留学は学習態度そのものに直接影響を与えたことも読み取れる。

しかし、学生のもっとも苦手<sup>2)</sup>とされる「ライティング」(44.4%)と「リーディング」(18.5%)は留学して培った能力や得たものという点では低いパーセンテージとなったが、「特になし」と回答した学生は皆無(0.0%)だった。

表3. 語学に関して留学して培った能力や得たもの (複数選択)	%	人数
英語力 (リスニング)	75.9	41
英語への興味	63.0	34
英語力 (スピーキング)	59.3	32
英語学習への意欲	57.4	31
英語に関する語彙力や表現力	55.6	30
英語力 (ライティング)	44.4	24
英語力 (リーディング)	18.5	10
特になし	0.0	0

また、「留学したことにより英語への興味が深まりましたか」(表4)という問いに対しては、実に98.1% (「とてもそう思う」(72.2%)、「そう思う」(25.9%))という高い割合で、学生が肯定的に回答しており、英語漬けの日々は学生への英語に対する興味という形でも大いに寄与していることが読み取れる。「そう思わない」と回答した学生は1名(1.9%)いるが、これはもともと英語への興味が高かったため留学後も変化していないと回答した可能性もあり、アンケート上の数字だけでは読み取れない結果となった。

表4. 留学したことにより英語への興味が深まりましたか？	%	人数
とてもそう思う	72.2	39
そう思う	25.9	14
そう思わない	1.9	1
全く思わない	0.0	0

次に「今までの英語学習の仕方を後悔したり反省したりしましたか」(表5)という問いに対しては、94.4%の学生が「そう思う」と回答し(「とてもそう思う」(57.4%)、「そう思う」(37.0%))、それに関連し、「これから英語学習に関してもっと努力しようと思いますか」(表



6) という問いには、98.1%の学生が「そう思う」と回答した（「とてもそう思う」（68.5%）、「そう思う」（29.6%）。このように1セメスターの留学を通し、自己の英語学習を振り返り反省することや、より高いレベルにおいて英語の勉強につなげていくという点で、留学は自己のモチベーションを上げる非常に効果的なカンフル剤といえることができる。

表5. 今までの英語学習の仕方を後悔したり反省したりしましたか？	%	人数
とてもそう思う	57.4	31
そう思う	37.0	20
そう思わない	3.7	2
全く思わない	1.9	1

表6. これから英語学習に関してもっと努力しようと思えますか？	%	人数
とてもそう思う	68.5	37
そう思う	29.6	16
そう思わない	1.9	1
全く思わない	0.0	0

## (2) 異文化・自文化理解及び異文化適応能力の獲得

次に2つ目の枠組み「異文化・自文化理解及び異文化適応能力の獲得」に関する質問では、留学により日本ではなかなか培うことの難しい異文化に対する興味が深まった様子もアンケート結果からうかがえる。

表7の「留学したことにより、異文化に対する興味が深まりましたか」という質問に対し、96.3%の学生が異文化に対する興味が深まったと回答している（「とてもそう思う」74.1%、「そう思う」22.2%）。また異文化理解に関して留学して培った能力や得たものとして（表8）、7割の学生が「異文化に対する好奇心」（70.4%）をあげ、半数近い学生が「異文化に対する理解」（46.3%）、「日本への理解」（46.3%）、「異文化間コミュニケーション能力」（44.4%）を留学して培った能力としてあげており、学生の異文化理解に対する影響もうかがい知ることができる。

表7. 留学したことにより、異文化に対する興味が深まりましたか？	%	人数
とてもそう思う	74.1	40
そう思う	22.2	12
そう思わない	3.7	2
全く思わない	0.0	0

表8. 異文化理解に関して留学して培った能力や得たもの（複数選択）	%	人数
異文化に対する好奇心	70.4	38
異文化に対する理解	46.3	34
日本への理解	46.3	25
異文化間コミュニケーション能力	44.4	24
国際感覚	37.0	20
異文化適応能力	35.2	19
文化的多様性の価値を理解する力	27.8	15
自己のアイデンティティの確立	24.1	13
特になし	0.0	0

また文化理解に関する質問の延長として、「留学したことにより、より日本が好きになりましたか」という問いに対しては88.9%の学生が肯定的な回答をし（「とてもそう思う」42.6%、「そう思う」46.3%）、否定的な回答を大きく上回った（表9）。このように異文化に接触することで自文化を見直す機会が生まれ、より肯定的な意味で自国をとらえることができるようになったと考えられる。「そう思わない」と回答した学生が9.3%、「全く思わない」と回答した学生が1.9%で、これは日本の事がもともと大好きで留学してもその度合いは変化しなかったという可能性もあり、また逆に留学により日本のことが嫌いになった可能性もあり、これはアンケート上の数字だけでは読み取れない結果となった。

表9. 留学したことにより、より日本が好きになりましたか？	%	人数
とてもそう思う	42.6	23
そう思う	46.3	25
そう思わない	9.3	5
全く思わない	1.9	1

### （3） 人間的成長

次に3つ目の枠組みである「人間的成長」に関する項目について考察したい。「留学したことにより自分自身の成長を感じていますか」（表10）という問いに対しては100.0%の学生が肯定的な回答をし（「とてもそう思う」（55.6%）、「そう思う」（44.4%））、否定的な回答「そう思わない」と回答した学生は皆無だった（0.0%）。同様に「留学は自分のためになりましたか」（表11）という質問に対しても100.0%の学生が肯定的な回答をし（「とてもそう思う」（81.5%）、「そう思う」（18.5%））、留学は語学や異文化に対する理解を深めるだけでなく、学生個々人の人間的成長にも大きく貢献していることが読み取れる。

表10. 留学したことにより、自分自身の成長を感じていますか？	%	人
とてもそう思う	55.6	30
そう思う	44.4	24
そう思わない	0.0	0
全く思わない	0.0	0

表11. 留学は自分のためになりましたか？	%	人
とてもそう思う	81.5	44
そう思う	18.5	10
そう思わない	0.0	0
全く思わない	0.0	0

次に「人間的成長に関して、留学して培った能力や得たもの」（表12）として、「視野が広がった」（63.0%）、「コミュニケーション能力」（63.0%）をあげる学生が最も多く、「人脈・友人」も61.1%と高いパーセンテージであった。このように現地の人々や海外からの留学生、日本各地からの日本人学生との繋がりやコミュニケーションを通して自己の成長を顧みる学生が多かった。

その他には、「積極性・自信・度胸」（40.7%）、「協調性」（38.9%）、「学習意欲（全般）」（33.3%）、「柔軟性・人間の幅」（29.6%）という項目が順にあげられており、留学前と比較し、多くの学生が様々な人間的成長を感じている結果となった。「特になし」と回答した学生は皆無で（0.0%）、留学は何らかの形で学生の人間的成長に寄与しているところがうかがい知れる。

表12. 人間的成長に関して留学して培った能力や得たもの（複数選択）	%	人数
視野が広がった	63.0	34
コミュニケーション能力（日本人同士）	63.0	34
人脈・友人	61.1	33
積極性・自信・度胸	40.7	22
協調性	38.9	21
学習意欲（全般）	33.3	18
柔軟性・人間の幅	29.6	16
実行力	27.8	15
自己理解	25.9	14
精神的な自立	24.1	13
主体性	13.0	7
目的の確立	9.3	5
特になし	0.0	0

## 5. おわりに

本学英米語学科では1学期間、学生を海外に送り出すセメスター留学を実施しているが、学生は何を学び、帰国するのか。本研究はセメスター留学の教育的価値を整理し、検証するために足立（2010）の研究を援用し、3つの枠組み（1. 外国語（英語）運用能力の獲得、2. 異文化・自文化理解及び異文化適応能力の獲得、3. 人間的成長）から論じた。まず、「1. 外国語運用能力の獲得」は客観的指標であるTOEIC IPの試験結果（リーディング、ライティング、スピーキング、リスニング力の向上）と質問紙調査による学生からの回答（学生の主観）をもとに分析を試みた。結果、客観的指標においても英語力の向上が見られ、学生の主観的感想においても自身の英語力の向上と手応えを感じている様子が見られた。また英語に対する興味の変化や英語学習そのものに対する学習態度の変化も顕著であり、今までの自身の英語学習への反省や、今後更に努力したいと思う積極的姿勢などが浮かび上がった。次に「2. 異文化・自文化理解及び異文化適応能力の獲得」は、質問紙調査により、自国では得られない知識や教養を異国で得、異文化に対する理解や文化的多様性の価値を理解する姿勢が読み取れた。また、「3. 人間的成長」では学生自らが自身の成長を示しており、全ての参加学生（100.0%）が留学は自分のためになり、留学によって自分自身の成長を感じたと回答している。

本研究はセメスター留学に参加した学生が何を学び、習得するのかという視点から興味深いデータが得られ、セメスター留学の教育的価値は短い期間（実質留学期間は8月～12月の4か月間）であっても、学生にとって高い効果を示していることが浮き彫りとなった。また現在途中段階であるが、留学の教育的価値を考察するために個人別態度構造分析（PAC分析）を用い研究を行っており、今後研究結果を報告する予定である。個人別態度構造分析とは社会心理学と臨床心理学の知見を持つ内藤（1993、2002）によって開発された分析方法で、個人に着目した質的研究でありながら、デンドログラムに基づき、調査協力者自身の枠組みで分析するという再現性・信頼性の高い量的・質的の両方の側面を兼ねた研究手法であるといえ（内藤、1993；2002）、質問紙調査やアンケート上の数字だけでは読み取れない参加学生の成長を理解できる手法であると手応えを感じていることを追記しておきたい。

さいごに、表13が示すように「留学経験は今後の人生において役に立つと思いますか」という問いに対しても100.0%の学生が“自分の為になる”と回答しており、「いいえ」と回答した学生は皆無（0.0%）であった。このように1学期間の留学であっても留学が与えた影響は著者の想像を超える大きさであったことが読み取れる。

表13. 留学経験は今後の人生において役に立つと思いますか？	%	人
はい	100.0	54
いいえ	0.0	0

## 【注】

- 1) 2010年4月11日付けのワシントンポスト紙に「かつて米国の大学にひきつけられていた日本人学生がうちに籠るようになった」という記事が掲載され、「内向き志向」との指摘が加速したが、果たして内向き志向が原因なのかというのは議論の余地がある。フルブライト・ジャパン（日米教育委員会）事務局長のデビッド・サターホワイト氏によると米国留学が減った理由として次の14の理由をあげている。14の理由とは、1. 少子化で学生数が減った、2. 日本国内の大学が増えた、3. 外国人教授や英語授業など国内の大学が国際化した、4. ネットを使えば世界中の情報が手に入る、5. 日本は豊かで居心地がいい、6. 就職活動が前倒しになり、留学すると不利になる、7. 企業は留学経験をあまり評価しない、8. 家計に余裕がなくなった、9. 米国の大学の学費が急激に上がった、10. 学生の英語力が足りない、11. 米国は危険との不安がある、12. 米国のビザが取りにくくなったとの誤解がある、13. 米国のイメージが低下した、14. 今の日本社会には留学を後押しする風潮がない。特に大きな要因が経済問題とし「ここ数年米国の大学は急ピッチで学費を上げている。授業料や部屋代、食費など留学中の9か月間にかかる諸費用の平均は、2011年～12年度が公立の4年制大学で3万3973ドル。3年前に比べて16%も上がっている」と述べた（日本経済新聞社、2011年12月14日）。
- 2) ライティング指導の難しさと指導法については、前田（2015）が論文の中で述べており、「日本語を母語とする英語学習者にとって大学レベルでの英語ライティングが容易でないと報告する研究」は数多い（Bamford, 1993；岡田&奥村&時岡, 1995）ことが記されている。

## 【参考文献】

- 足立恭則（2010）大学学部課程における海外留学の教育的価値とカリキュラムにおける位置づけ『東京英和女学院大学人文・社会科学論集』第28号、pp. 77-91
- Bamford, J. (1993) Beyond grammar translation: Teaching students to really read. In P. Wadden (Ed.), *A handbook for teaching English at Japanese colleges and universities* (pp. 63-72). New York: Oxford University Press.
- ETS (2015) 「TOEIC®テストについて」 <http://www.toeic.or.jp/toeic/about.html> (2015/4/30)
- IES Abroad (2011) The IES Abroad Map For Study Abroad Program (5<sup>th</sup> ed.). <http://www.iesabroad.org/system/files/IESAbroadMap2011.pdf> (2015/5/20)
- 河合淳子（2011）「大学における学部学生の留学促進」2011年5月号、Vol.2、pp. 1-12
- 経済産業省（2011）関連資料・データ集 [http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san\\_gaku\\_kyodo/sanko1-3.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_kyodo/sanko1-3.pdf) (2014/11/4)
- 木村啓子（2011）「短期海外研修プログラムの効果と役割」 <http://www.jasso.go.jp/about/documents/keikokimura.pdf> (2014/11/10)
- 小池生夫・高田智子・松井順子・寺内一（2010）『企業が求める英語力』国際ビジネスコミュニケーション協会
- 前田ひとみ（2015）「“知識伝達モデル”を利用した英語コミュニケーション能力の育成—指導の理論と実践案」『目白大学高等教育研究』第21号、pp. 27-36
- 文部科学省（2008）「『留学生30万人計画』の骨子とりまとめの考え方」（平成20年） [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1249711.ht](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/attach/1249711.ht) (2014/11/5)
- 文部科学省（2014a）「日本人の海外留学状況」平成26年3月文部科学省集計 [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/\\_icsFiles/fieldfile/2014/04/07/1345878\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/fieldfile/2014/04/07/1345878_01.pdf) (2014/11/4)
- 文部科学省（2014b）「トビタテ！留学JAPAN」 <http://www.tobitate.mext.go.jp/sp/about/> (2014/11/10)
- 内閣官房・内閣府・外務省・文部科学省・厚生労働省・経済産業省・観光庁（2014）「若者の海外留学促進実行計画」 <http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/ryuugaku/pdf/honbun.pdf>

- 内藤哲雄（1993）「個人別態度構造の分析について」『人文科学論集』、27、pp. 43-69
- 内藤哲雄（2002）『PAC分析実施法入門「改訂版」：個を科学する新技法への招待』、ナカニシヤ出版
- 日本学生支援機構（2011a）「海外留学経験者追跡調査（平成23年度）」  
[http://www.jasso.go.jp/study\\_a/enquete2012.html](http://www.jasso.go.jp/study_a/enquete2012.html)（2014/10/27）
- 日本学生支援機構（2011b）「海外留学経験者追跡調査報告書（平成23年度）」  
[http://www.jasso.go.jp/study\\_a/documents/k\\_h23\\_07.pdf](http://www.jasso.go.jp/study_a/documents/k_h23_07.pdf)（2014/10/20）
- 日本学生支援機構（2011c）「海外留学経験者追跡調査報告書（平成23年度）」  
[http://www.jasso.go.jp/study\\_a/keikensha.html](http://www.jasso.go.jp/study_a/keikensha.html)（2015/1/21）
- 日本経済新聞（2011年12月14日）「日本の若者は本当に内向きなのか 小倉和夫×鈴木謙介×デビッド・サターホワイト」  
<http://www.nikkei.com/article/DGXBZO37206690S1A211C1000000/>（2014/1/21）
- OECDインディケーター（2014）<http://www.j-cast.com/2010/04/17064626.html?p=all>
- 岡田妙・奥村清彦・時岡ゆかり（1995）「大学における英作文指導の在り方：英作文実態調査の報告」、『JACET全国大会要綱34』、一般社団法人大学英語教育学会、pp. 190-193.
- Rubin, D. & Sutton, (2001) Assessing student learning outcomes from study abroad. *International Educator* 10 (2), pp. 30-31
- 産学人財育成パートナーシップ（2010）グローバル人材育成委員会報告書 産学官でグローバル人材の育成を  
[http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san\\_gaku\\_ps/2010globalhoukokusho\\_summary.pdf](http://www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/2010globalhoukokusho_summary.pdf)  
（2014/11/4）

（平成27年11月4日受理）